＜抜刷り＞

富士見市立資料館調査研究報告

第２号

富士見市立考古館開館 50 周年記念号

2024.12.28

埼玉県 富士見市立資料館

講演記録	荒井幹夫	無我夢中 －考古館創成期－
講演記録	会田明	市民の好奇心が考古館を変えた
回想	和田雅子	とにかく熱かった
★論文	和田晋治	縄文中期勝坂式期の猪装飾付土器
論文	早坂廣人	花積下層～関山式土器について
事例報告	駒木敦子	公民館で「社会教育施設の専門職」について考えた
研究ノート	山野健一	石鳥居が伝える江戸と鶴馬の結びつき
研究ノート	田ノ上和宏	入間ごぼうに関する調査と考察
資料紹介	佐藤一也	上内手遺跡第 10 地点出土の陶磁器
資料紹介	高橋宏之	南通遺跡出土の下小野系土器について
資料紹介	大野朝日	新田遺跡第 1 号住居跡について
資料紹介	齋藤麻那	打越遺跡出土の押出型石匙について
資料紹介	菅沼慎太郎	南通遺跡近世墓坑と出土銭貨

※1　本文中の執筆者の肩書きは 2024 年 3 月 31 日時点です

※2　見開きの左側に偶数ページがくると見やすいように編集しています
両面印刷する場合はこのページごと印刷することをおすすめします
2 ページずつ印刷する場合はこのページを飛ばして印刷してください

※3　抜刷り共通の表紙です。該当する記事に★を付けています

＜論文＞

縄文中期勝坂式期の猪装飾付土器

和田晋治（水子貝塚資料館）

はじめに

縄文時代中期の勝坂３式期には人面装飾（顔面把手）や双環装飾（ミミズク把手）が隆盛する。その成立過程については、前号においてまとめた（和田 2021）。それらと共に当該期に顕著に認められるようになるのが、ヘビやイノシシを模（かたど）った装飾である。

猪装飾については、当市羽沢遺跡出土の獣面装飾付土器（通称「ムササビ土器」、埼玉県指定有形文化財）が典型例とされていることもあり、筆者もかつて資料の集成を図っている（和田 2011、2012）。本稿は、それに新たな資料を加えて再編集したものである。実測図は文献から複写し、写真は許可を得て自ら撮影したものである。

1. 勝坂３式期猪装飾の研究史

勝坂式期の猪装飾付土器が発掘調査報告書に掲載された最初の資料としては中山谷遺跡のものが最初であろうか。「動物の顔面を思わせる把手から…」といった説明がなされている（吉田 1972）。その後、安道寺遺跡からは小型品ではあるが猪のように見える動物の頭が付いた土器が出土し、勝坂式期の猪装飾の存在が明らかとなった（山梨県教育委員会 1978）。70 年代後半から貫井遺跡、野塩前原遺跡、羽沢遺跡などで出土するが、動物の顔のようなイメージを受ける装飾として理解され、それらが猪としての認識はなかった。ちなみに、井草八幡宮の釣手土器について土肥孝氏は「吊手部分に動物意匠文を装飾した例。頂部付近にある動物は猪を表現し、吊手部には蛇が二匹配されている」と解説しているが、これは猪の尻のほうを鼻先に見立ててのことのようである（土肥 1982）。

画期となったのは釈迦堂遺跡でまとまった資料が出土したことによる。小野正文氏は、この種の把手を「イノシシ」として分類している（小野 1987）。その後、小野氏をはじめ渡辺誠氏、新津健氏などが勝坂式期の猪装飾について積極的に論じるようになる。

渡辺氏は、猪が多産であることから猪装飾を女性の象徴とし、これに対し蛇装飾をマムシとみなし男性の象徴とした。土器につけられる人体・動物装飾は、男性＋女性、マムシ＋女性人面、マムシ＋猪の組合せにより理解できるものとし、両者の合体したものをイノヘビと呼んだ（渡辺 1992）。

小野氏は、中期の釣手土器を例に猪装飾の特徴を明確にした。さらに尾畑遺跡の人面把手付土器や羽沢遺跡の獣面把手付土器などを例に深鉢形土器に付けられた猪装飾も紹介し、人面装飾や双環装飾と組み合わさる場合が多いことを指摘した。ただし、人面装飾や双環装飾の頂部につけられた蛇装飾に主眼を置いており、あくまで猪と蛇との対峙という点に重きを置いている。また、猪装飾成立の要因として食料として猪の飼育や猪のもつ神性をあげ、蛇との対峙理由を火の起源と食物起源神話に求めている（小野 1992）。

新津健氏は、上の平遺跡出土土器を例に深鉢形土器の猪装飾と蛇装飾の対峙構成を説き、類例として羽沢遺跡や野塩前原遺跡出土土器をあげている（新津 2003）。新津氏は、別稿で釣手土器も含め類例を集成し猪装飾と蛇装飾の対峙関係を強調している（新津 2009）。

末木健氏は、小野、新津両氏の猪装飾に関する検討から、猪装飾が蛇や人面と合体、対峙して造形されるのは、一つの動物文様では表現で

きない要素を満たすためであり、土器に対して、あるいは中で煮られるものに対して、人間の要望や願望が満たされるように生み出されたものとする。また、牙がないこと、背中に縞模様が描かれることが多い点を理由に、猪装飾は猪の幼獣を表現したものではないかと推察している。成獣の生殖能力や強靭さよりも幼獣の人懐こさや愛らしさ、将来の豊かさを望んで造形したのではないかと述べている（末木 2009）。

今福利恵氏は、勝坂式土器の動物意匠文様はヘビ、カエル、イノシシの三種に集約されるとし、三種の対峙構造や融合、土偶・顔面把手との関係、さらに擬人化の様相から文様のもつ物語性や神話性についても言及した（今福 2019）。

2. 勝坂式期猪装飾の造形的な特徴

獣面（猪）の装飾（把手）は、前期諸磯ｂ式期に盛行するが、続く諸磯ｃ式期にはわずかな事例が知られる程度で実質的に消滅する。中期五領ヶ台期に一度成立するものの、勝坂 1 式段階には継承されることはなかった。そして、勝坂 3 式に突然出現するのである。

では、猪装飾とはどのような造形なのか。その典型例といえる梨ノ木遺跡例を参考に、識別するポイントとなる特徴をあげる（図 1 ）。本例は、イノシシを意匠としていることが一目瞭然で、これを見れば誰もが合点するものである。鼻は円もしくは半円で造形され二つの小孔が開けられ鼻孔が表現されている。単孔もしくは南無孔のものもある。目と耳は一体化しており、U字状の小突起で耳が造出され、目となる沈線が入る。細く吊り上った目がいかにもイノシシ的であるが、小突起を伴わず沈線のみで描出したものも存在する。胴体は丸みをおび、背筋にはあたかもたてがみのような刻みの入る隆線が施される。胴体の両脇には三叉文や渦巻文が充填され、小孔が穿たれているものもある。尾の部分は環状突起と一体となるものが多く、四足の表現はない。土器本体へは、口縁部の場合は内向きに、胴部の場合は上向きに取付けられる。これらの特徴を有する装飾を「猪」と定義した上で資料を調査し、収集を行った。

図 1　猪装飾の造形

3. 猪装飾の事例

1) 深鉢形土器の口縁部・口辺部に付くもの

山梨県甲州市安道寺遺跡（図 2-1、図 10-1）

小野氏が「猪頭蛇尾」と呼称した、猪装飾を代表する著名な土器である。小型土器の口縁部上に猪装飾が内向きに付いている。鼻には鼻孔と口があり、丸目で、尖った耳が付いている。かなりリアルな造形であり別の動物の顔にも見える。頭部のみで胴体はなく、他の猪装飾が体全体なのに対して異質であり、同類とするのにはためらいがある。勝坂 3 式（井戸尻式）期。

長野県茅野市梨ノ木遺跡（図 1、図 2-2、図 10-2。小林 2003）　猪装飾は、口縁部上に内向きに付いている。鼻には鼻孔と口があり、周囲には細かい刻みが入る。胴体の充填文様は、左側が三叉文と渦巻文、右側が渦巻文となっている。勝坂 3 式（井戸尻式）期。

埼玉県入間市水窪遺跡（図 2-3、図 10-3。野村 1995）　口縁部に 2 基の猪装飾が向い合って付く唯一の例である。たてがみ部分の下部が渦巻状になる点が他とは異なる。勝坂 3 式期。

神奈川県横浜市大熊仲町遺跡（図 2-4。坂上 2000）　猪装飾の位置や土器全体の器形、文様構成が本部台遺跡例に類似する。しかし、猪装飾そのものは簡略化されている。勝坂 3 式期。

埼玉県飯能市加能里遺跡（図 2-5。富本 1998）

前述 2 例と同類であるが、目の沈線が省略され、胴体も細見である。そのためか、パックリと口を開けた魚のようにも見える。勝坂３式期。

東京都小金井市中山谷遺跡（図 2-6、図 10-5。吉田格 1972）　深鉢形土器の内湾する口縁部

に猪装飾が上向きに施される。鼻先部分は全損しており、形状は不明である。胴体は左右両側に三叉文が充填され、下部には小さな環状装飾を伴う。猪装飾の対面にも大型突起が配されているが欠損しているため全容は不明である。勝坂3式期。

東京都杉並区下高井戸塚山遺跡（図 2-7。重住 1988）　深鉢形土器の口縁部に土器頸部の大型環状装飾と一体となる半球状の猪装飾が付いている。鼻部分はふさがっており、孔は開いていない。胴体は右側が穿孔、左側が渦巻文で三叉文が充填されており、青梅市駒木野遺跡例（図 4-4）や甲府市上の平（図 4-3）遺跡例と同類である。猪装飾の対面には渦巻状突起が施されている。勝坂3式期。

東京都町田市本部台遺跡（図2-8、図10-4。戸田 1984）　実測図の反対面に猪装飾が付いている。 猪装飾は、口縁部から頸部にかけて上向きについている。円孔が開く鼻は大きく、上にせり上がっている。対面には渦巻状の小突起が施されている。勝坂3式期。

神奈川県横浜市都筑区加賀原遺跡（図 2-9。石井 2012）　左面を剥落する。耳と目を省略している。器形、文様構成とも本部台遺跡例に近似する。勝坂3式期。

神奈川県横浜市都筑区加賀原遺跡（図2-10。同上）　鼻部を欠損する。尻尾部の環状突起がない。勝坂3式期。

東京都町田市田端東遺跡(図2-11。浅川2010)　本来、口縁部上にせり上がるべき鼻の部分が口縁部に貼り付いている。耳・目の部分も変形が認められる。勝坂3式期。

多摩ニュータウン№.520 遺跡（図 2-12。金持 2004）　口縁部から頸部の環状突起にかけて、猪装飾と蛇装飾が対峙するように施されている。注目すべきは、猪装飾の鼻の部分に半球状の突起があることである。この半球状の突起は、原町農業高校前遺跡例（図 4-1）のような無面相の人面ではないかと思われる。ちょうど、人面の頭部に猪のフードをすっぽり被せたようなイメージである。蛇＋人面＋猪の構成となるが、原町農業高校前遺跡例のような人面を挟み蛇と猪の対峙とみているが、上の平遺跡例のような人面装飾頭上の蛇装飾が猪装飾に置換されたものともとれる。勝坂3式期。

東京都小金井市貫井遺跡（図 2-13。吉田格 1979）　猪装飾の付く口縁部破片である。胴体は刻みのある隆線が正中に施されるのみで、三叉文等の充填はない。勝坂3式期。

埼玉県ふじみ野市西ノ原遺跡（図 8-1。岡崎 2023）　猪装飾の胴体は細身で、たてがみとなる矢羽状の刻みの入る隆線は頸部の環状突起を通過しさらに下に垂下している。目と耳は隆線によて描出され、鼻は単孔である。勝坂3式期。

東京都町田市忠生遺跡（図3-1。伊藤2010）　口縁内側に鼻先が大きく突き出るように水平に施されている。こうした内向きのものは内側に強く屈折する幅広の口縁部に施されることがほとんどであり、こうした屈折幅の少ない口縁部に乗る例は茅野市梨ノ木遺跡例（図 2-2）がある。胴体は三叉文が充填され、下端が環状装飾に連なる。目・耳の突起部分にも三叉文状の刻みが入るが、これは他に類例がない。鼻先には2つの孔が穿たれており、まさに猪の鼻といった面相を呈している。勝坂3式期。

神奈川県平塚市原口遺跡(図3-2。長岡2002)　内湾する口縁部に付く猪装飾の破片である。鼻部分には単孔が開き、胴体には三叉文が入る。本例も胴体下端が環状装飾と一体となっている。勝坂3式期。

埼玉県嵐山町行司免遺跡(図3-3。植木1988)　深鉢形土器の口縁部に猪装飾が上向きに付いている。鼻の単孔は円形ではなく蒲鉾形となっている。土器の器形や撚糸地文から勝坂3式期でも新しい段階のものと思われる。

神奈川県相模原市川尻中村遺跡（図 3-4。天野 2002）　緩く屈折する口縁部上に双環装飾が施されている（右図）。この双環装飾は通常の造形と異なり、板状に成形され、そこに2つの孔が貫通している。したがって、内側からも

外側からも似たような形状となる。また頂部の突起は大型で羽沢遺跡例（図 5-1）や大熊仲町例に類似する。猪装飾は、この双環装飾の根元に続くように上向きで施されている。鼻部分は単孔で、目・耳は駒木野遺跡例（図 4-4）と同様に沈線で描かれている。双環装飾の対面には、小さな環状突起が付いている。勝坂 3 式期。

長野県朝日村熊久保遺跡（図 3-5。樋口 2003）

深鉢形土器の外向き人面装飾の直下の口辺部に猪装飾が上向きに施される。猪装飾は誇張された目・耳の部分が残存している。外向きの人面装飾は、長野県岡谷市海戸遺跡の顔面把手付深鉢形土器（重要文化財）が著名である。熊久保遺跡例とは背面が双環状になっている点も共通している。海戸遺跡例には人面の対面に蛇装飾があるが、熊久保遺跡例にもそうした可能性がある。また、同様の位置に猪装飾が付くものとして川尻中村遺跡例（図 3-4）がある。川尻中村遺跡例は双環装飾であるが、外側から見た場合も顔とみなすことができ、とするならば同じ関係にあるといえる。勝坂 3 式期。

2) 深鉢形土器の胴部に付くもの

山梨県北杜市原町農業高校前遺跡（図 4-1。三田村 2005）　口縁部上に目、鼻、口を省略した人面装飾が付く。こうした無面相のものは東京都八王子市椚田遺跡、埼玉県狭山市宮地遺跡、長野県松川町北垣外遺跡などが著名であり、人面装飾の一種として捉えられる。猪装飾は、その対面の胴部に上向きに施されている。鼻の出っ張りが無く、耳が彫り出されている点が他と異なる。さらに、人面装飾の下部、猪装飾の対面にはとぐろを巻く蛇装飾も施されている。これまでの例は、猪＋人面もしくは双環の組合せであったが、これに蛇が加わり、猪装飾＋人面＋蛇の構成となっている。勝坂 3 式（井戸尻式）期。

山梨県北杜市甲ッ原遺跡（図 4-2、図 10-6。山本茂他 1998）　口縁部に、おそらく人面装飾などが乗っていた痕跡が明確に残っている（実測図の口縁右側）。その直下の胴部に猪装飾が（実測図右側）、対面の胴部に蛇装飾が（実測図左側）施されている。蛇＋人面＋猪の構成で、原町農業高校前遺跡例とは真逆の配置である。勝坂 3 式（井戸尻式）期。

3) 深鉢形土器の屈折口縁に水平に付くもの

山梨県甲府市上の平遺跡（図 4-3。中山 1987）

猪装飾は鼻には単孔が開き、目・耳は小突起で表現されている。胴体は、下部は環状突起に連なり、右側には円孔が開き、左側は三叉文が入っている。対面には頂部にとぐろを巻く蛇を伴う双環装飾が施されている。新津氏は、これを猪と蛇の対峙として捉えているが、猪に対して蛇が小さくアンバランスである。むしろ、羽沢遺跡例と同様に双環装飾との対峙を主体とすべきと判断される。双環装飾の片側が歪んでいるが、比較的多く認められる形態である。また、蛇についても、人面装飾の頂部につけられている蛇と同義とすれば理解できる。勝坂 3 式（井戸尻式）期。

東京都青梅市駒木野遺跡（図 4-4。吉田格 1998）　猪装飾が施される部位ともう一方の大型装飾との対峙関係にある。鼻には単孔が開いているが、目・耳は隆起せず沈線でのみでの描出である。胴体の左側は渦巻文が充填され、右側は円孔となっている。対面の大型装飾は、複雑である。背面は大きな孔が開き双環装飾に類似するが内面は判別しがたい。勝坂 3 式期。

埼玉県富士見市羽沢遺跡（図 5-1。高橋 1985）

猪装飾は、水平に強く屈折した口縁部に内向きに施される。目・耳は小突起で表現され、耳裏には縦に刻みが入る。胴体は丸く、後方は口縁直下の環状突起と一体になっている。胴体の両脇には円孔が穿たれており、外側から見た場合にこの部分が目に、環状突起が鼻の部分にあたり、あたかも獣の顔のようである。個人的には、内側から見るよりも外側から見た方がよほど獣面に見え、この土器の作者は外側から眺めた際の造形も強く意識しているのではないかと

考えている。鼻は塞がれており、孔はない。勝坂3式期。

静岡県裾野市尾畑遺跡（図5-2。裾野市1992）「く」の字状に屈折する口縁部に猪装飾が施される。欠損部分が多く、全容は不明であるが、胴体下部が環状突起に連なり、左側のみに円孔が入る。対面には人面装飾が座る。この人面装飾には手が付属しており、左手を頬に、右手を胸のあたりに当てている。そうしたことから、人面装飾というよりも土偶装飾の部類に属す。勝坂3式期。

東京都清瀬市野塩前原遺跡（図 5-3。内田1982）　羽沢遺跡例や尾畑遺跡例と同様に「く」の字状屈折口縁に猪装飾が施されている。猪の造形は簡略化されており、耳は小突起ではなく渦巻文を伴う円錐状となり尖っている。鼻部分は単孔である。対面の装飾は欠損しているため詳細を知りえないが、右側に残存する瘤状の突起は尾畑遺跡例に類似し、その内側にある縦３本の短い沈線は両手を交差させるポーズをとる土偶の指先ではないかと推定される。このことから、尾畑遺跡例のような土偶が乗っていた可能性が高い。勝坂3式期。

神奈川県相模原市下中丸遺跡（図 5-4。荒井1992）　猪装飾は目・耳は小突起、胴体には三叉文が入る。鼻は塞がれており、孔はない。対面には大型の板状装飾が付く。中央にハート形を逆さまにしたような孔がある。これは２つの孔が結合したものと考えられ、双環装飾の変種と考えられる。勝坂3式期。

4）釣手土器に付くもの

山梨県甲州市北原遺跡（図6-1。上川名 1971）釣手部分に3基の猪装飾が施されている。鼻の周囲には刻みが付き、鼻孔が開いており、梨ノ木遺跡例（図1）の猪装飾に近い。勝坂3式（井戸尻式）期。

神奈川県小田原市久野一本松遺跡（図 6-2。戸田 2002）　釣手残存部に 2 基の猪装飾が付いている。頂部の装飾がどんなものであったのかは不明であるが、その両脇に 2 基ずつ、計 4 基の猪装飾があったのであろう。勝坂3式期。

東京都杉並区井草八幡宮周辺遺跡（図 6-3。杉並区教育委員会 1985）　重要文化財「顔面把手付釣手形土器」として知られる著名な土器であるが、これまで写真のみで実測図がなかった。掲載した実測図は永瀬史人氏・中村耕作氏らによるものである（永瀬・中村他 2012）。これにより「顔面把手」は背面に付いていることがわかる。この「顔面」部分の釣手側には縦に刻みの入る小突起が2基付いている。それは、これまで説明してきた猪の目・耳の形状そのものである。釣手の背面という位置関係をふまえると、「顔面」すなわち円錐状に突き出て口をすぼめたように見える突起部は猪の胴体にあたり、鼻の部分が釣手に貼り付いている猪装飾ととらえてほぼ間違いないものと考えられる。

釣手部は右側部分と頂部を欠損しているが、残る左側には上向きの 2 基の蛇が配されている。右側にも左側と同様の蛇が付き、頂部もおそらく上向きに大きく口を開いた蛇のような突起となる可能性が高い。勝坂3式期。

長野県長和町中道遺跡（図 6-4）　釣手部頂部に大型のもの1基とその両脇に2基ずつ、さらに胴部背面に上向きに4基の計9基の猪装飾が付いている。頂部と両脇の2基には人面装飾を伴っている。曽利Ⅰ式期。

山梨県西桂町宮の前遺跡（図6-5。奈良1993）釣手部分頂部の大型円状突起の両脇に２基、計4基の猪装飾が付いている。鼻の円孔の周囲や胴体に入る三叉文が沈線ではなく、刻線である点が他には認められない技法であり、やや新しい様相と思われる。曽利Ⅱ式期。

静岡県三島市観音洞遺跡（図6-6。芦川1994）釣手部に2基の猪装飾が付くものと推定される。対になる1基は欠損している。鼻は2孔である。曽利Ⅱ式期。

山梨県韮崎市石之坪遺跡（図6-7。閏間2001）三窓型の釣手土器であるが、背面の鉢部と釣手部を欠損する。猪装飾は釣手部分の頂部の環

状装飾と両脇の環状装飾の間に施されている。鼻孔部分は孔ではなく渦巻文となっている。曽利Ⅱ式期。

山梨県笛吹市一の沢遺跡（図 6-8。小林 1989）

釣手の欠損部分が大きく、全体の把握が困難であるが、正面釣手の胴部近くに 1 基、さらに背面釣手部分に横向きに 1 基の猪装飾が確認できる。曽利Ⅱ式期。

東京都府中市武蔵台東遺跡（図 6-9。坂東 1999）　一般にその造形からコウモリと呼ばれている動物装飾である。しかし、鼻の造形から猪と推定される。加曽利ＥⅢ式土器に伴って出土しており、猪装飾の最終段階であろうか。

山梨県甲州市安道寺遺跡（図 8-2。小林 2003）

釣手の両脇に上向きの猪装飾が付けられている。勝坂 3 式期。

以上の他に、長野県茅野市茅野和田遺跡から釣手土器のものと思われる破片が出土している。

5）鉢形土器に付くもの

山梨県都留市美通遺跡（図 7-1。依田 2001）

内屈する口縁部に猪装飾が施されている。全体の 1/3 を欠損しているが残部に 2 基の猪装飾が施されている。おそらく 3 ないし 4 基の猪装飾で構成されていたと推定される。勝坂 3 式期。

東京都あきる野市松海道遺跡（図 7-2。橋口 2001）　口縁の約半分と底部を欠損する鉢形土器である。猪装飾は強く屈折した口縁部に付いている。対面にもなんらかの装飾があった可能性が高い。勝坂 3 式期。

山梨県笛吹市西原遺跡（図 7-3。野崎 2002）

猪装飾は口縁から胴部にかかるように施されている。欠損しているため詳細は不明だが複数の個体で構成されているようである。勝坂 3 式（井戸尻式）期。

6）破片

神奈川県相模原市下中丸遺跡（図 7-4。荒井 1992）　「く」の字に強く屈折する口縁部上に内向きに施されている。器形から羽沢遺跡、野塩前原遺跡、駒木野遺跡（図 5-1、5-3、4-4）の各例と同類と判断される。

東京都町田市多摩ニュータウン№ 245 遺跡（図 7-5。山本孝他 1998）　通常は先端に造出されている鼻の突出部が省略されている。少数だが北杜市原町農業高校前遺跡例（図 4-1）や大熊仲町遺跡例（図 2-4）にも認められる造形である。勝坂 3 式期。

山梨県甲州市釈迦堂遺跡（図 7- 6 ～ 10。小野 1987）　6 から 9 は深鉢形土器の口縁部位のもの、10 は釣手土器の破片であろうか。

山梨県北杜市原町農業高校前遺跡（図 7-11。三田村 2005）　一見、猪装飾には見えないが、目・耳の表現からそれとわかる。胴体は横に 2 本の刻みの入る隆帯によって上下に区画され、下部には渦巻様の隆帯が貼り付けられている。沈線による渦巻文を立体化したものだろうか。

東京都八王子市多摩ニュータウン№ 72 遺跡（図 7-12。丹野 1999）　目・耳、胴体部分の破片である。中空で、猪装飾の造形方法がよくわかる資料である。

埼玉県飯能市落合上ノ台遺跡（図 7-13・14。柳戸 2001）　同一個体である。鼻孔があり、胴体には沈線で円が描かれている。剥離痕から深鉢形土器に施されていたものと推定される。

7）猪装飾が変異した可能性のあるもの

猪装飾の主文様の一部が省略されたもの、もしくは変異した可能性のあるものも存在する。その事例として、東京都小金井市貫井遺跡（図 9-1。吉田 1979）、神奈川県横浜市大熊仲町遺跡（図 9-2。坂上 2000）、山梨県北杜市海道前 C 遺跡（図 9-3・5。山梨県埋文 2000）、埼玉県富士見市羽沢遺跡（図 9-4。和田 1990）、埼玉県志木市西原大塚遺跡（図 9-6。徳留 2015）をあげた。いずれも猪装飾の変異種として確証に至っていないため、ひとまず可能性の指摘にとどめておく。

4. まとめ

まず、猪装飾の分布と時期について述べてみたい。分布は、山梨県を中心に、長野県、静岡県東部、神奈川県、東京都、埼玉県西部と、勝坂式土器の分布圏のほぼ全域に広がっている。分布の中心は、その出土数からも明らかなように山梨県から多摩丘陵にあるが、山梨県と並び勝坂式土器の中心地ともいえる長野県からの出土例が少なく、西関東にまとまる傾向がある。時期的には、勝坂3式期に成立し、曽利Ⅱ式期まで存続している。その間にほとんど姿を変えておらず、短期間のうちに成立し、消滅するという印象である。猪装飾が施される土器の器形は、勝坂3式期は深鉢形土器、鉢形土器、釣手土器であるが、曽利式期は釣手土器のみに限定される。小野氏は、有孔鍔付土器には人面や蛇の装飾はあっても猪装飾は皆無であることを指摘している（小野 1992 他）。それから 30 年が経過し資料が増加した現在も同様である。勝坂3式（井戸尻式）土器から曽利Ⅰ式土器への変遷を辿ると、器形や文様に大きな変化が認められる。猪装飾に限らず、人面・双環装飾も激減し、深鉢形土器には岡谷市目切遺跡の胴部に人面装飾を貼り付けた破片など数例が知られるのみとなる。蛇装飾についても同様の傾向にある。曽利Ⅱ式期には加曽利 E 式土器の影響が顕著となり、勝坂式土器からの伝統的な技法は断絶し、まったく異なる土器へと変化をとげる。唯一、例外なのが釣手土器である。曽利式期にも製作され、人面や蛇、猪の動物装飾が施されるなど、勝坂式土器からの伝統を色濃く残している。これは、釣手土器が特殊な器であるがゆえであろうか。

次に、猪装飾と他の装飾と組合せについて述べてみたい。猪装飾には、単独で施される「単体型」、複数が施される「複数体型」、人面や双環装飾、蛇と組合わさる「別種複合型」が存在する。複数体型は、深鉢形土器では入間市水窪遺跡のみで、釣手土器が主体である。問題となるのは別種複合型である。確認できた組合せを列記すると、猪＋人面（尾畑遺跡、野塩前原遺跡、熊久保遺跡、北原遺跡）、猪＋双環（羽沢遺跡、川尻中村遺跡、上の平遺跡、下中丸遺跡、大熊仲町遺跡）、人面＋猪＋蛇（原町農業高校前遺跡、甲ッ原遺跡、多摩ニュータウン№ 520 遺跡）となっている。ただし、上の平遺跡例は、双環上に蛇が乗っているので猪＋双環＋蛇とすることも可能である。双環や人面と対をなす事例が圧倒的に多く、これが基本的な組合せとなると考えられる。双環装飾も人面装飾も出自は土偶装飾付土器にある。土偶は女性であるから、双環装飾も人面装飾も当然女性を表現したものと解釈できる。渡辺氏は、蛇装飾は男性を、猪装飾は女性を象徴したものとしている。そして、蛇装飾と猪装飾の対峙は、婚姻、生殖と関係し、その土器で調理された食物は赤ん坊であり、再生した新たな生命を意味するとしているとする（渡辺 1992 他）。その論に従えば、猪も女性なら双環・人面も女性である。女性像と女性像が向き合うという構図になってしまうのである。

最後に、猪装飾と対極をなす蛇装飾との比較をしてみたい。蛇装飾は、猪装飾に比べ数量が圧倒的に多く、数百例にも及ぶと思われる。数量的には全く比較にならないが、成立期や消滅期をほぼ等しくしている。単独で施される場合が多いが、人面装飾や双環装飾と対となるものも多い。人面装飾では長野県富士見町下原遺跡、岡谷市海戸遺跡と榎垣外遺跡（図 10-7）、埼玉県志木市西原大塚遺跡（図 10-8）、双環装飾では岡谷市花上寺遺跡（図 10-9）、甲州市釈迦堂遺跡、笛吹市一の沢遺跡などから出土している。特に西原大塚遺跡例、花上寺遺跡例は、羽沢遺跡例と同様の器形であり、その対極に位置するものである。

いわゆるサンショウウオ文・ミズチ文などと呼ばれる抽象文は初期の蛇装飾であるとの見解が示されており、人面装飾や双環装飾との対峙構成は山梨県北杜市酒呑場遺跡例や東京都世田谷区堂ヶ谷戸遺跡例のように勝坂1式期からすでに認められる。

蛇装飾が猪装飾と異なるのは有孔鍔付土器に施された事例が認められることである。甲州市安道寺遺跡、神奈川県厚木市林王子遺跡、嵐山町行司免遺跡などがある。林王子遺跡の有孔鍔付土器は、人面装飾付として有名であるが、筆者は蛇と人面の対峙構成にあるものと理解している。猪装飾と蛇装飾は、数量の多寡はあるものの、盛衰時期や施される器種、装飾構成など極めて類似性が高い。唯一、猪装飾には有孔鍔付土器に施された事例がないことに相違があるが、もともとこの土器は個体数が少なく、今後の調査の進展によって発見される可能性は残されている。また、原町農業遺跡例と甲ッ原遺跡例の猪装飾と蛇装飾の置換にみるように、両者はその意義は別として同等に扱われていることが理解される。

おわりに

猪や蛇そして人面などの装飾は、縄文人の豊穣や子孫繁栄の願望を表徴したものであり、それを施した土器は信仰の道具として使用されてものと語られることが多い。人面や猪、蛇装飾が施された土器が祭祀などに実際に使用されていたものであるとしたら、その消滅は単なる土器の変化に止まらず信仰に関わる習俗そのものも変化していると考えられる。こうした課題については、今後の追加事例や研究動向を見ながら思考を深めていきたい。

引用・参考文献

芦川忠利・池谷初恵 1994『五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡Ⅰ・Ⅱ』三島市教育委員会

浅川利一他 2010『田端東遺跡』町田都市計画道路 2・1・5 号線用地内遺跡調査会

天野賢一他 2002『川尻中村遺跡』かながわ考古学財団調査報告 133

荒井清一 1992『神奈川県相模原市下中丸遺跡』相模原市当麻・下溝遺跡群調査会

石井寛他 2012『加賀原遺跡・佐江戸 8 遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 45

伊藤玄三他 2010『忠生遺跡Ａ地区(Ⅱ)－ A1 地点縄文時代遺物編(1)』 忠生遺跡調査会

今福利恵 2019「勝坂式土器における動物文様と人体表現」『研究紀要 35』山梨考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

植木弘 1988『行司免遺跡』嵐山町遺跡調査会

内田祐治 1982『野塩前原』清瀬市文化財報告 1

閏間俊明 2001『石之坪遺跡（西地区)』 韮崎市教育委員会

岡崎裕子他 2023『市内遺跡群 27』ふじみ野市文化財調査報告第 28 集

小野正文 1987『釈迦堂Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 21 集

小野正文 1989「土偶付土器について」『下総考古学 11』下総考古学研究会

小野正文 1992「イノヘビ―猪蛇装飾のある土器について―」『月刊考古学ジャーナル№.346』

小野正文 2008「物語性文様―勝坂土器様式を中心として―」『総覧 縄文土器』

小野正文 2022「釣手土器のイノシシ」『モノ・構造・社会の考古学－今福利恵博士追悼論文集－』今福利恵博士追悼論文集刊行委員会

金持健司 2004『多摩ニュータウン遺跡№.520 遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 50 集

上川名昭 1971『甲斐北原・柳田遺跡の研究』

小林広和他 1989『一の沢遺跡調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 42 集

小林広和 2003「蛇身捻装飾について」『山梨考古学ノート』田代孝氏退職記念誌刊行会

小林健治他 2003『梨ノ木遺跡』茅野市教育委員会

坂上克弘 2000『大熊仲町遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 26

重住豊他 1988『下高井戸塚山遺跡』杉並区埋蔵文化財発掘調査報告第 16 集 下高井戸塚山遺跡調査会

末木健 2009「縄文時代の動物・人体文様を解く」『山梨考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会

杉並区教育委員会 1985『杉並区縄文土器写真集成』文化財シリーズ 14

裾野市 1992『裾野市史 第1巻((資料編 考古)』
高橋敦 1985「羽沢遺跡第21地点」『富士見市遺跡群Ⅲ』富士見市文化財報告第34集
丹野雅人 1999『多摩ニュータウン遺跡№72、795、796遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第50集
土肥孝 1982『日本の美術第190号 縄文時代Ⅱ（中期)』 至文堂
徳留彰紀他 2015『志木市遺跡群22』志木市の文化財第64集
戸田哲也 1984『玉川学園本部台遺跡調査報告』玉川学園本部台遺跡調査委員会
戸田哲也他 2002『久野諏訪ノ原遺跡群』小田原市文化財調査報告書第101集
富元久美子 1998「加能里遺跡第16・20・21次」『飯能の遺跡（25)』飯能市教育委員会
永瀬史人・中村耕作・高野和弘・中島将太 2012「東京都井草八幡宮所蔵釣手土器の再検討」『日本考古学協会第 78 回総会研究発表要旨』日本考古学協会
長岡文紀 2002『原口遺跡Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告134
中村耕作 2013『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』未完成考古学叢書10
中山誠二 1987『上の平遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第29集
奈良泰史他 1993『宮の前遺跡発掘調査報告』西桂町文化財シリーズ第15号
新津健 2003「上の平遺跡出土の動物装飾付土器とその周辺」『研究紀要19』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
新津健 2007「土器を飾る猪～山梨を中心とした猪造形の展開～」『研究紀要23』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
新津健 2009「縄文時代の猪形土製品」『山梨考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会
新津 健 2022「中期初頭縄文土器の動物装飾と展開」『モノ・構造・社会の考古学－今福利恵博士追悼論文集－』今福利恵博士追悼論文集刊行委員会
野崎進 2002『西原・柳原遺跡（第２次)』境川村埋蔵文化財調査報告書第17輯
野村智 1995『水窪遺跡』入間市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第17集
橋口尚武他 2001『松海道遺跡』あきる野市松海道遺跡調査会
板東雅樹他 1999『武蔵国分寺跡西方地区 武蔵台東遺跡Ⅱ縄文時代』都営川越道住宅遺跡調査会
樋口昇一他 2003『熊久保遺跡第10次発掘調査報告書』朝日村文化財調査報告書第1集
三田村美彦 2005『原町農業高校前遺跡（第２次)』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第221集
山梨県埋文 2000『古堰遺跡・大林上遺跡・宮の前遺跡・海道前 C 遺跡・大林遺跡』
柳戸信吾 2001『落合上ノ台遺跡』飯能市遺跡調査会
山本孝司他 1998『多摩ニュータウン遺跡№.245・341遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告第57集
山本茂樹他 1998『甲ッ原遺跡Ⅳ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第145集
吉田格 1972『中山谷』小金井市文化財調査報告書１ 小金井市教育委員会
吉田格 1979『貫井遺跡』 小金井市貫井遺跡調査会
吉田格 1998『駒木野遺跡』青梅市遺跡調査会
依田幸浩他 2011『美通遺跡Ｂ区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第275集
和田晋治 1990「羽沢遺跡第40号住居址の一括出土土器」『富士見市遺跡調査会研究紀要６』
和田晋治 2011「縄文中期勝坂式土器の猪装飾」『あらかわ』第13号 あらかわ考古談話会
和田晋治 2012「縄文中期勝坂式土器の猪装飾－追補－」『あらかわ』第14号 あらかわ考古談話会
和田晋治 2021「縄文中期勝坂式期の土偶装飾付土器」『富士見市立資料館調査研究報告第１号』富士見市立資料館
渡辺誠 1992「縄文土器の形と心」『月刊考古学ジャーナル№.346』

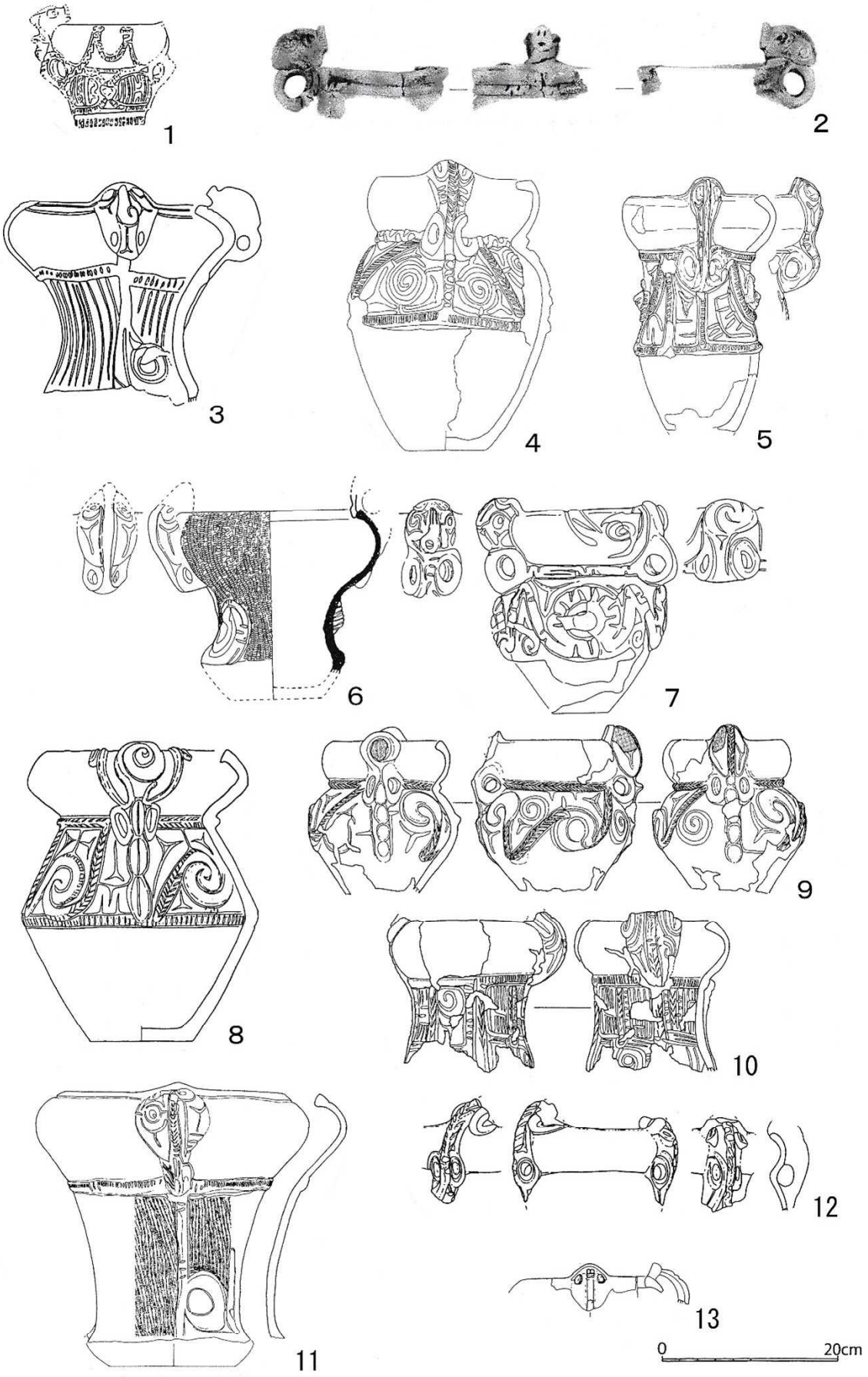

図2

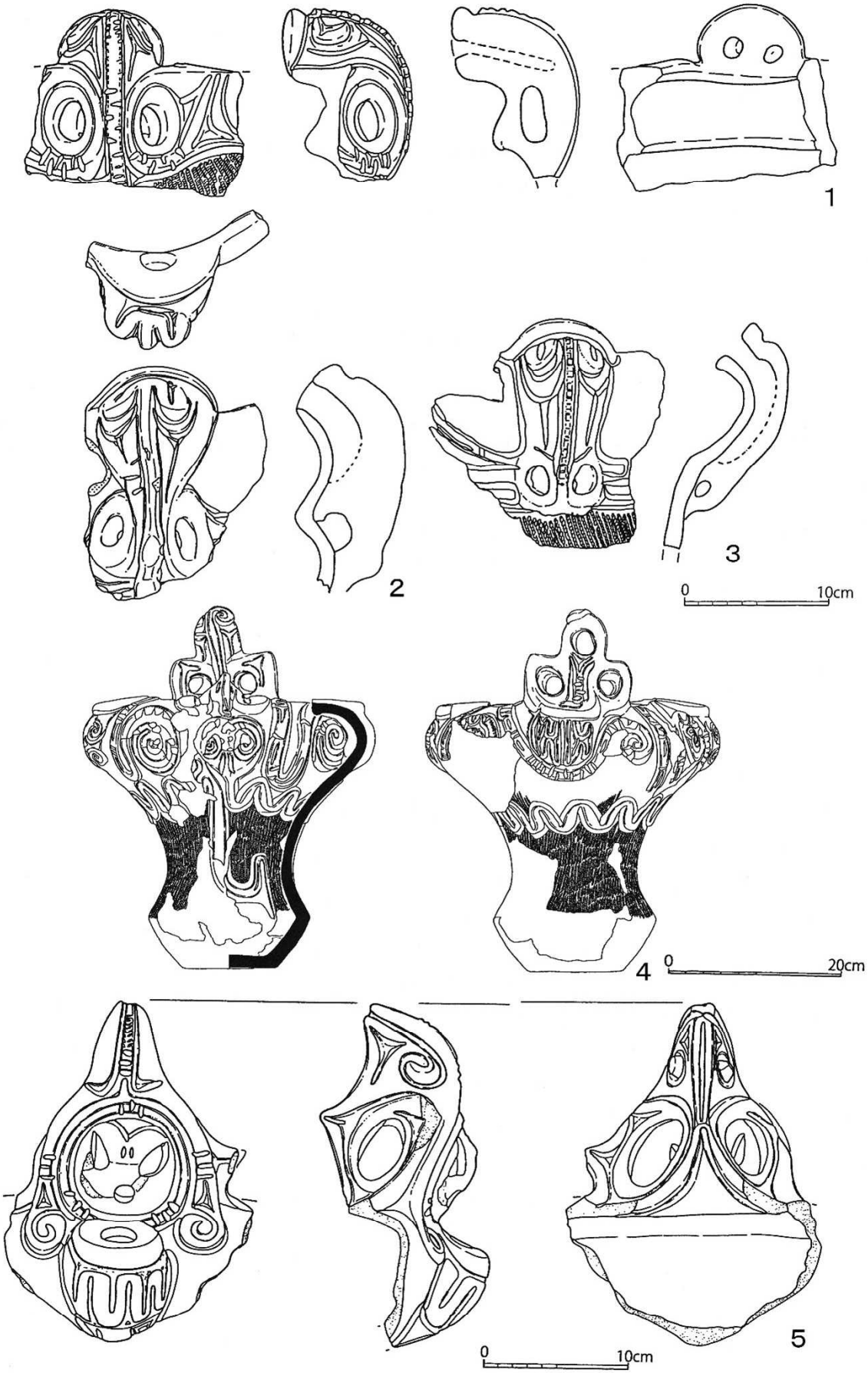

図3

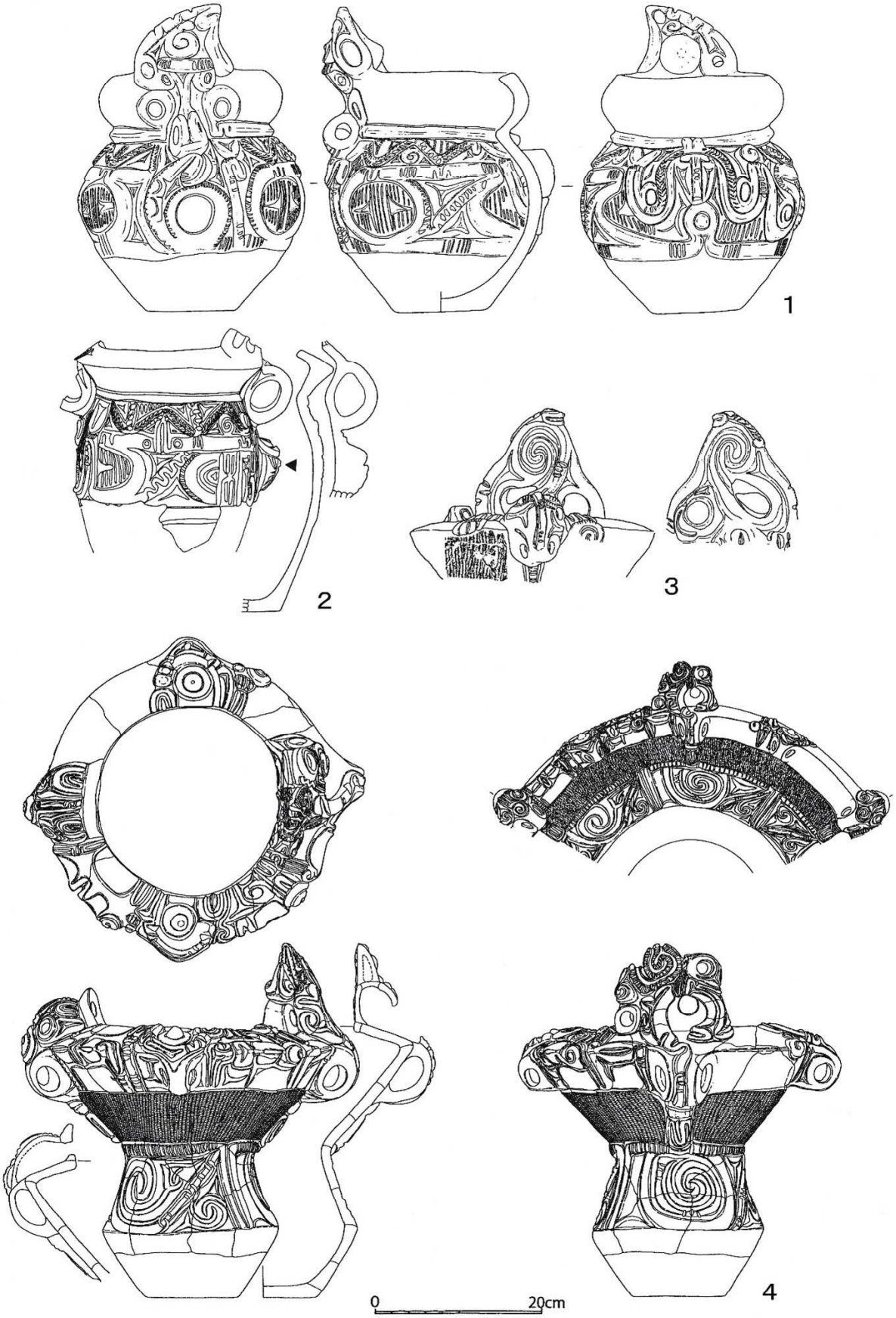

図 4

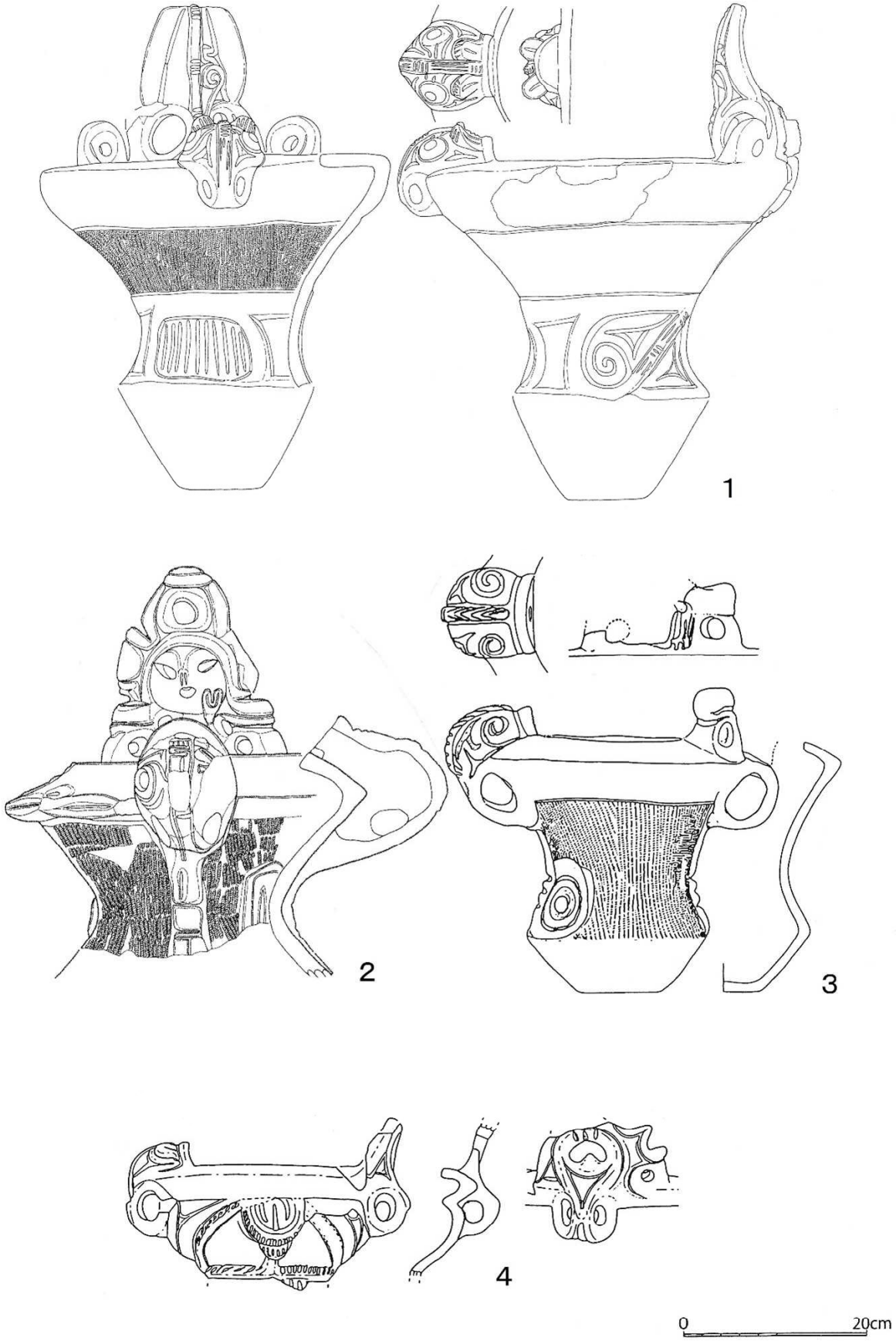

図5

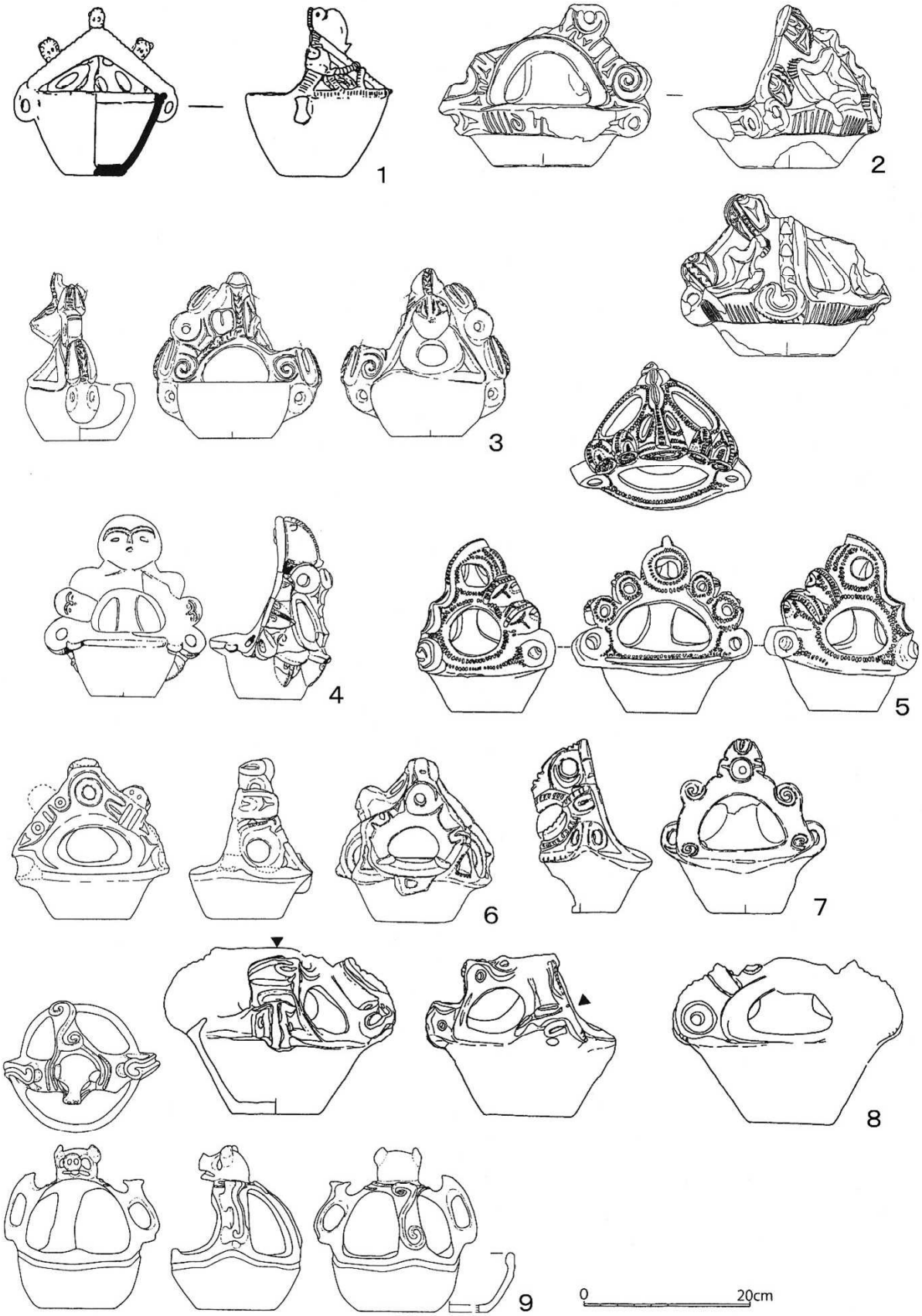

図 6

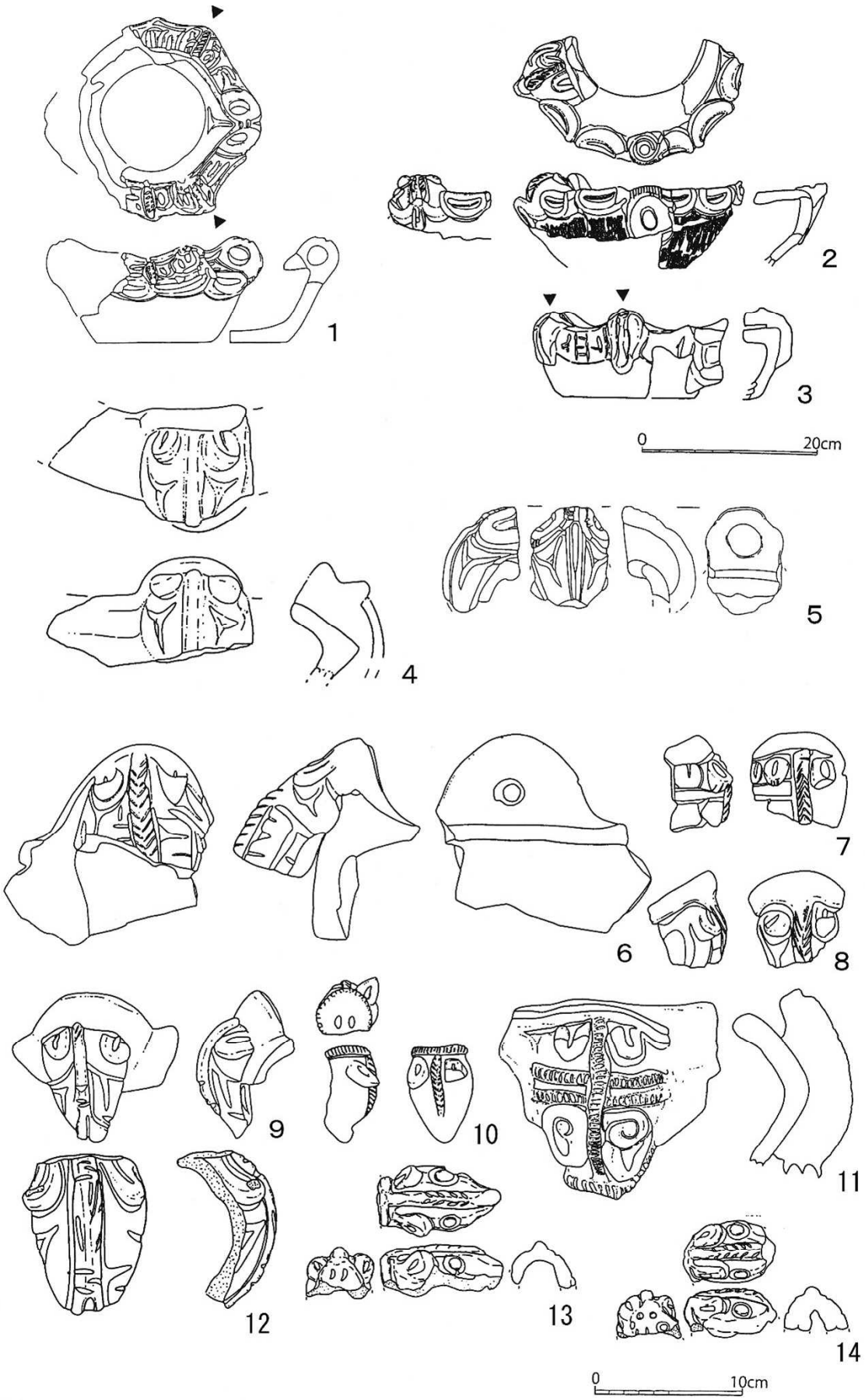

図7

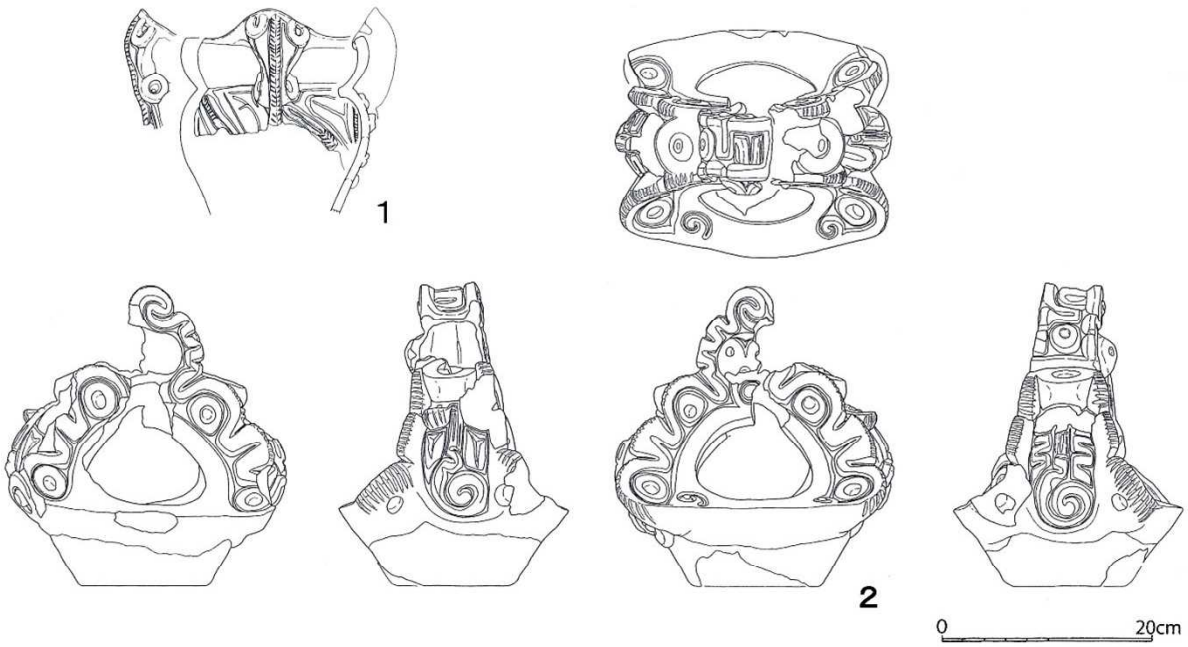

図 8

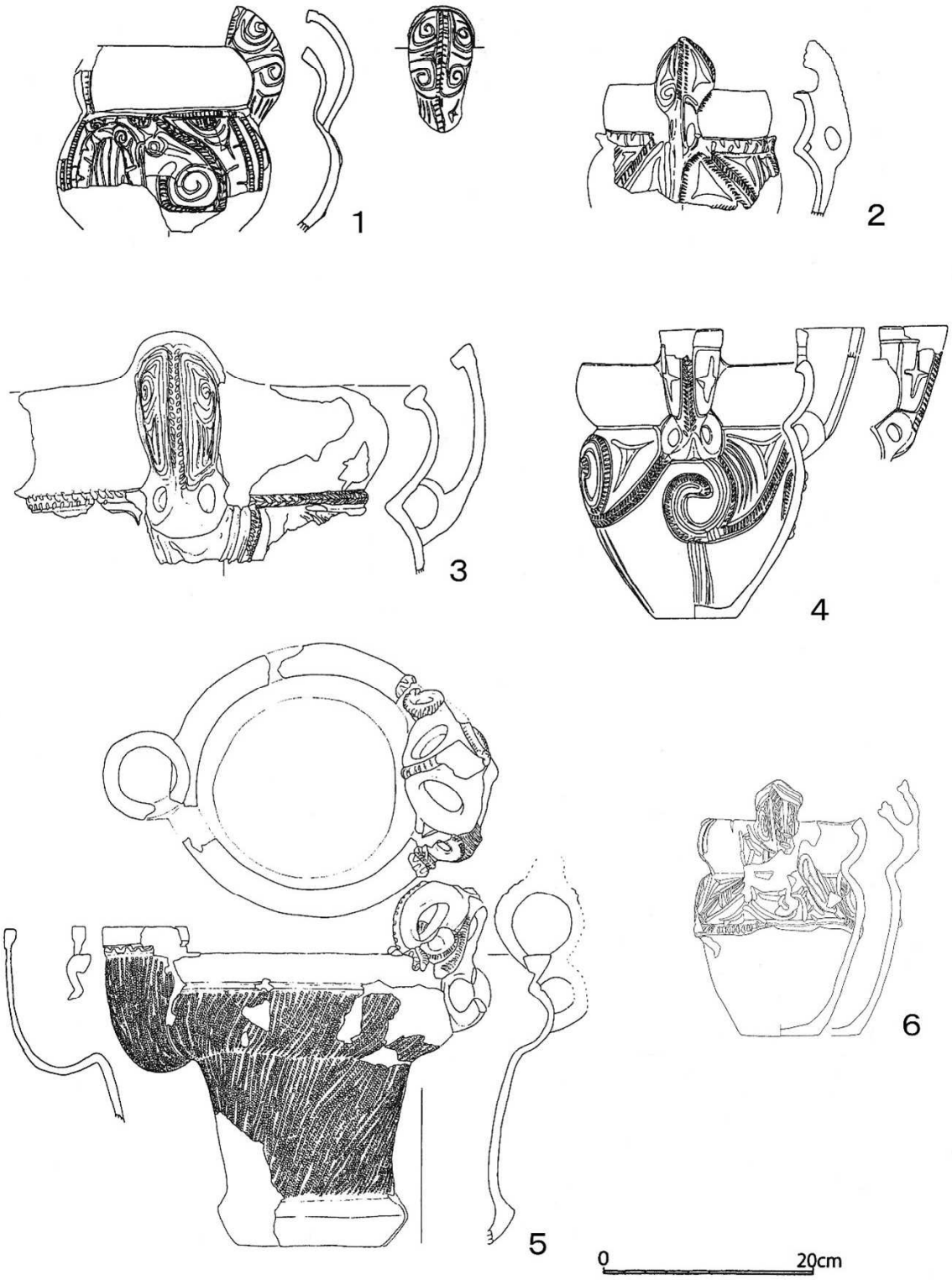

図9

1　安道寺遺跡

2　梨ノ木遺跡

3 水窪遺跡

4 本部台遺跡

5　中山谷遺跡

6　甲ッ原遺跡

7　榎垣戸遺跡

8　西原大塚遺跡

9　花上寺遺跡

図 10